

県産地ビール海外へ

リンゴ、モモ、コメの3銘柄



従業員と初の海外輸出を喜ぶ吉田店員(左から3人前) - 10日、福島市

県産の農産物を使った地ビールを製造・販売する福島市のみちのく福島地ビール(吉田重男社長)は商品を初めて輸出する。輸出先はオーストラリアで、リンゴ、モモ、コメを使った地ビール3銘柄が園地で販売される見込み。風評被害に苦しみ本県農家の励みになれば。商品はすべて「農家の期待を載せた第一弾」が18日、横浜港を出国する。

風評払拭 大きな期待

震災・原発事故

4年目の
起点

商品は昨年販売を開始し、ばやばや広がる「林檎のラガー」に代わってリンゴの甘酸っぱい「リンゴ」やモモの芳醇な香り

が楽しめる「桃のラガー」に加え、和食に合うまろやかな味が特徴の「米麦酒マインビール」。郡山市で9月1日に開催された「食の商戦」で、今秋は「リンゴ」や「モモ」に出展した際、商品はオーストラリアから訪れた海外農家の目に留まった。9月1日、白川ファクトリーで注文が入り、各銘柄とも1箱24本入りで箱ずつ輸出する。

「明確なニューフェイス。農産物に伝えたことが見たい」と、風評被害を手掛けた、みちのく福島地ビール店長の吉田重男(みちのく)は喜びを隠さない。吉田さんが農産物にこだわりの持ち始めたのは、東日本大震災があった2011年(平成23年)の12月。「せっかく育てた果物が売れ

ず、売れない。風評被害にあえぐ農家の声を聞いたのがきっかけだった。吉田さんは「売れ残った果物を利用したい」との思いで12年に商品開発に着手。試行錯誤の連続だったが、周囲の支えが力となった。伊達市の農産小野大樹さん36が農家の協力の輪

を広げ、販売の交渉に当たった。福島市の西川和明教授(63)は市場動向などをアドバイスした。

「林檎のラガー」の「桃のラガー」の販売当初は「放射能は大丈夫か」などの声もあった。吉田さんはイベント会場に出向き、安全性と農産物のうまみを生かした味をPRした。そのかいもあって「女性を中心にリピーターが増えた」という。現在は復興支援として川内村産のソバの実を使

ったビールを、吉田から代々く買った。